

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業知っておきたい話」—144回—(2面)
- ・主食用米高騰のなぜ(3面)
- ・牛肉を食べる意義(4面)
- ・農家拝見 高知県南国市(有)齊藤牧場(5面)
- ・25年度農業危害防止運動(6面)
- ・哺乳子牛の管理のポイント(7面)
- ・畜産物需給見通し(8面)

開拓情報

発行所
公益社団法人全国開拓振興協会
〒102-0093 東京都千代田区平河町1-2-10
TEL 03-6268-9995
FAX 03-6268-9996
ホームページ <https://www.kaitakusya.or.jp>
全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

新基本計画 閣議決定

今後は農業予算確保も焦点に

政府は4月11日、農業政策の方向を定める新たな「食料・農業・農村基本計画」を閣議決定した。本計画を閣議決定した。急速な生産者の減少などによる農業の危機的状況に對して、集中的に農業の構造転換を行い、食料安全保障の充実を図る。

【新基本計画30年度の目標】

- 食料自給率
 - ・供給熱量ベースの総合食料自給率：45%
 - ・生産額ベースの総合食料自給率：69%
 - ・摂取熱量ベース食料自給率：53%
- 食料の備蓄の確保(米・麦)
- 49歳以下の担い手数：現在の水準(4.8万(2023年))を維持
- 農地面積：412万ha
- 1経営体当たりの生産量(生産量/経営体数)：86t/経営体
- 生産コストの低減：米(15ha以上の経営体)9,500円/60kg
小麦、大豆 2割減(現状比)
- 肥料の国内資源利用拡大と化学肥料原料の備蓄の確保
- 防除ニーズに対応した農業の確保
- 主な穀物の国産種子の完全自給の継続
- 一時的な輸入停滞等にも対応可能な飼料穀物の備蓄の継続
- 農産物の付加価値の向上
- 動植物防疫の確実な実施
- 輸入の安定化

新たな基本計画では、食料自給率以外にも多くの目標を設定した(図)。

カロリーベースの自給率の目標は、現行の45%を維持した。

それぞれの目標に対し、少なくとも年1回検証を行い、実現性を高めることとしている。

新たな基本計画は、改正基本法で定める基本理念の実現を図るため、①我が国の食料供給、②輸出の促進(輸出拡大等による「海外から稼ぐ力」の強化)、③国民一人一人の食料安全保障・持続的な食料システム、④環境と調和のとれた食料システムの確立・多面的機能の発揮、⑤農村の振興、という5つのテーマで整理されている。

それぞれのテーマに複数の目標を設定し、その目標に対しKPI(重要達成度指標)を設けて、基本的な施策の方向性を示した。

表 地方説明会の開催日程

ブロック	開催地	日	時
北海道	札幌市	5月22日	13:30~15:30
北海道	帯広市	5月21日	15:00~17:00
東北	仙台市	5月16日	13:30~15:30
関東	さいたま市	5月21日	13:00~15:00
北陸	金沢市	5月26日	13:00~15:00
東海	名古屋市	5月20日	10:00~12:00
近畿	京都市	5月23日	14:00~16:00
中国	岡山市	5月22日	14:00~16:00
四国	高松市	5月27日	13:00~15:00
九州	熊本市	5月20日	13:30~15:30
沖縄	那覇市	5月16日	10:00~12:00

※詳細は農水省ホームページ参照

閣議後の会見で江藤農相は「生産基盤の強化、食料自給力の向上を通じて、食料安全保障を確保し、これまでの殻を破る」と述べた。

今後、同基本計画で掲げた様々な施策を確実に実行するために、必要な農業予算をいかに確保するかが、焦点となる。

農水省は、新たな基本計画に関する地方説明会を開催する(表参照)。

24年度 食料・農業・農村 白書(案)

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。

の展望、の3項目からなる取り組みを推進する、としている。

①では、新たな基本計画についての概要などを取り組み等を紹介。

②では、合理的な価格形成の仕組みづくりのた

農水省は4月17日、食料・農業・農村政策審議会企画部会を開き、24年度食料・農業・農村白書の本文案を議論した。当年度の特集は、①新たな食料・農業・農村基本計画の策定、②合理的な価格の形成のための取り組みを推進、③スマート農業技術の活用と今後

農水省は、新たな基本計画に関する地方説明会を開催する(表参照)。

農水省は、新たな基本計画に関する地方説明会を開催する(表参照)。

長野ハケ岳農協に大臣賞

GGAPの取り組みが認められる



農水大臣賞を受賞した津金組合長(右)と笹川副大臣

農水省は5月9日、農水省講堂において「24年度未来につながる持続可能な農業推進コンクール」の表彰式を開催した。全開連会員である、長野ハケ岳農協が見事、農林水産大臣賞を受賞した。同コンクールは、持続可能な農業の確立を目指す、意欲的に経営や技術の改善等に取り組んでいる農業者等を表彰するもの。本年度からGAP部門と有機農業・環境保全型農業部門の隔年開催となり、24年度はGAP部門のみの募集となった。同農協は、ハケ岳山麓の冷涼な自然条件を活かした、レタス・白菜等を中心とした高原野菜の大産地を管轄とする。独自に作成したグローバルGAP(以下、GGAP)日誌と営農支援システムで、各構成員が自ら営農記録を行う仕組みを構築することにより、構成員、事務局ともに事務作業の負担軽減を図っている。また、農協全体での内部監査体制の確立や生産者との信頼関係の構築により、GGAPの認証取得を進めてきた。まず、東京オリンピック・パラリンピック2020を機にJGAPの認証を取得。その後、取引先への供給に対応すべく、GGAP認証取得を進めるなど、認証取得生産者数や認証品の取引数量増加などが評価された。

同農協の津金一成組合長は「ハケ岳の麓の自然と千曲川の源流の下にあるところが我々の産地だが、未来永劫、この農地が続けばという気持ちでいる。GGAPをうまく活用して、農業を引き続き行っていきたい」と語ってくれた。

早場米の田植え 戦跡を後世に伝える



高知県南国市の(有)齊藤牧場から南へ16kmほどの場所にある掩体壕は、戦前、戦闘機を守るために造られた格納庫だ。同市前浜地区の7基の掩体壕は、戦争の歴史を伝え保存できるよう、終戦後農地や農道の整備が行われた。06年には「前浜掩体群」として南国市史跡に指定された。

掩体壕を守るように広がる水田では、4月上旬から早場米の田植えが始まった。早場米は通常の稲より早く育つ特徴があり、7月中旬には収穫が始まる。

温暖な気候に適した品種の田植えが進む高知県は既に初夏の気温だ。

食料農業
知っておきたい話
第144回

「盗人に追い銭」外交の
生贄はコメと乳製品 下

東京大学大学院特任教授・名誉教授 鈴木宣弘氏



☆コメと酪農はTPP水準を超える米国への譲歩が明白

第一次トランプ政権での日米貿易協定では、牛肉と豚肉を譲り、コメや乳製品のTPP枠などの米国分の実施は先送りされた。

第二次トランプ政権では、コメについては、少なくとも、7万tの米国のTPP新設枠の実現だけでなく、さらなる上乗せを求めていることは間違いないだろう。

TPP11では、米国も含めた全体の輸入枠を、米国が扱ったのに、その

まま他の11カ国に適用した品目、乳製品も含めて33品目もある。これらについて、日米2国間で米国枠を「二重」に再設定すれば、ただちに「TPP超え」となる。

日欧EPAではTPPを上回る譲歩をしているから、それを日米間にも適用することは間違いのないので、それだけでもTPP水準を超えることはすでに明白である。

例えば、TPPでは米国の強いハード系チーズ（チェダーやゴーダ）を関税撤廃し、ソフト系（モッツアレラやカマンベール）は守ったと言った。

しかし、日欧EPAではEUが強いソフト系の関税撤廃を求められ、今度ソフト系も差し出し

てしまい（EUからの輸入の増加に含わせて無税枠を拡大する）、結局、実質的な全面的自由化になつてしまった。それが米国にも適用されるからである。

しかも、TPPで米国も含めて譲歩したバター・脱脂粉乳の輸入枠7万t（生乳換算）を、TPP11で米国が抜けても変更せずに適用したので、豪州、ニュージーランドは大喜びだが、これに米国分（3万t程度）が「二重」に加われば、全体としてTPP水準を超えることも明らかだ。

☆日本の食と農の独立のために毅然と主張しよう

折しも、国内米価の高騰で、輸入米を増やす必要性が議論されている。米国側は、コメの関税が700%だと牽制し、77万tのミニマムアクセス

飲用乳等向け4年連続減

24年度用途別販売実績(中酪)

中央酪農会議(中酪)は4月15日、24年度の指定生乳生産者団体(指定団体)の用途別販売実績を公表した。

用途	乳量(t)	前年比(%)
飲用牛乳等	2,912,401	97.7
脱脂粉乳・バター等	1,782,113	104.1
液状乳製品	1,289,066	100.1
チーズ	423,153	99.1
はっ酵乳等	421,603	99.1
合計	6,828,336	100.0

(中酪の資料を基に作成)

地域別で見ると、北海道以外の地区が減産となった。減少幅が大きかったのは北陸地区で、能登半島地震の影響が続いていることもあり、6万3911t(同3.5%減)となった。逆に、山形、茨城、栃木、福井、岐阜、奈良、鳥取、島根、山口、宮崎の各県は前年度を上回っている。

用途別販売実績(表)で見ると、飲用牛乳等向けは291万2401t(同2.3%減)と、約

6万7000tの減少となった。21年度は1.9%減、22年度は3.0%減、23年度は3.8%減と、減少幅が大きくなつてきたが、当年度はやや減少幅は抑えられた。しかし、4年連続の減少には変わりなく、牛乳の消費拡大を図っていく必要がある。

主食用米の輸入上限引上げ案

財務省 財政制度等審議会の分科会

財務省は4月15日、財政制度等審議会の分科会で、政府が無関税で輸入する米(ミニマムアクセス米、以下MA米)のうち、主食用に回す上限を引き上げる案を示した。

政府は現在、年間約77万tのMA米を、国際ルール(ガットウルグアイラウンド)に基づき輸入している。このうち主食用には、国内の農家を調整弁として、全体の米

また、財務省の狙いとして、MA米を主食用以外の米(加工用や飼料用など)として購入した場合のマイナスを減少させることが挙げられる。主食用以外の米の輸入では、輸入価格よりも国内

への販売価格の方が低くなつており、食用以外に仕向けることがマイナスとなる。また、保管料などの管理経費もかかる。22年度はMA米等の損益全体として、674億円の赤字となつている。

また、同分科会では、米・水田政策のあり方が示されている。

図1 農業・食料関連産業の国内生産額の構成

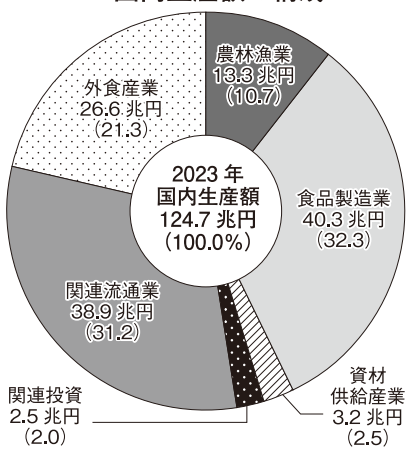
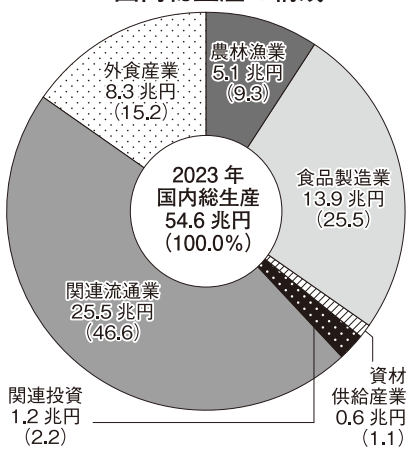


図2 農業・食料関連産業の国内総生産の構成



国内生産額 全経済活動の1割

23年 農業・食料関連産業の経済計算

農水省が公表した「23年農業・食料関連産業の経済計算(概算)」によると、農業・食料関連産業の国内生産額は124兆6926億円で、前年より7.9%増加した。

民経済計算」における経済活動別の産出額の合計に占める割合は10.8%となっている。

部門別に見ると、農林漁業は13兆2949億円と、農業・食料関連産業は、卸売業のマージン額が増加したこと等から、

1)。米や野菜、鶏卵、水産物の価格上昇などにより、生産額が増加したこと、全体として前年より4.7%増加した。

部門別に見ると、農林漁業は5兆950億円と、全体の9.3%にとどまった(図2)。

一方、関連流通業は25兆4748億円と、全体の約半分を占めている。

主食用米高騰のなぜ？

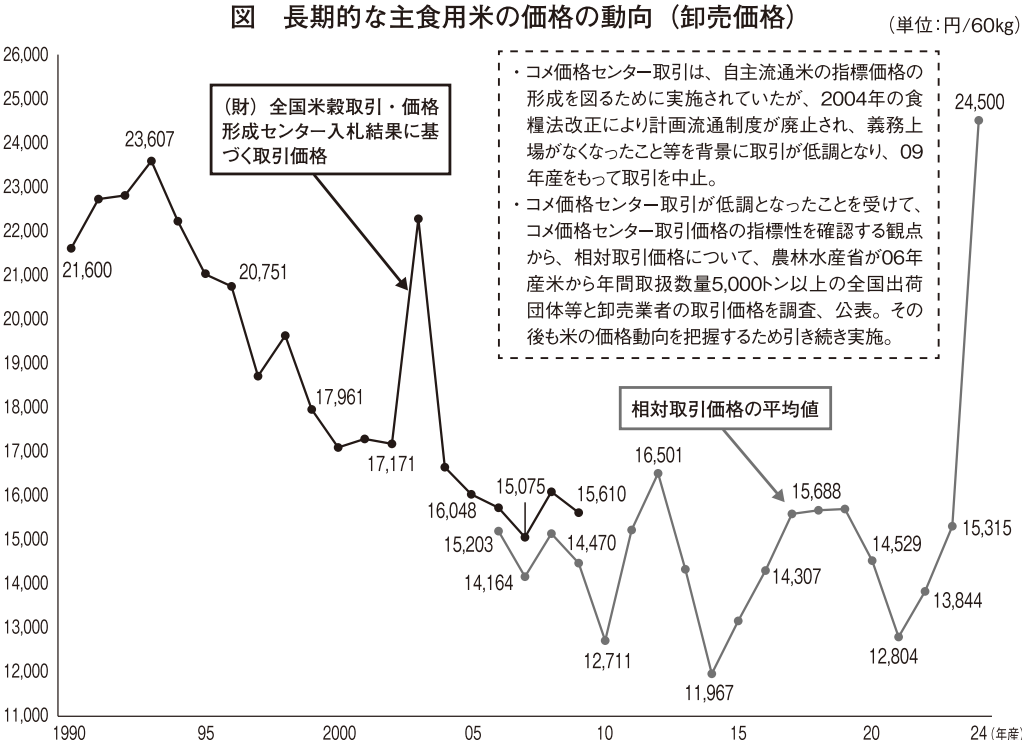
米農家は全く儲かっていない

「令和の米騒動」といわれ、昨年から主食用米の高騰が続いており、深刻な状況となっている。備蓄米の放出が行われているが、価格はむしろ上昇傾向にある。POSデータによるスーパーでの販売価格は4月14～20日で42200円/5kgで、前の週より3円上昇した。前年同期の2088円と比べると、2倍以上に高騰している。

◆これまでの生産者米価は下がりが続いていた

左の図は農水省が出した、長期的な主食用米の価格の動向を表している。24年価格が高騰したといっても、93年の水準に戻っただけで、生産者の利益はそれほど多くは無い。しかも93年の頃より生産資材等の経費は格段に増えている。

・コメ価格センター取引は、自主流通米の指標価格の形成を図るために実施されていたが、2004年の食糧法改正により計画流通制度が廃止され、義務市場がなくなったこと等を背景に取引が低調となり、09年産をもって取引を中止。
・コメ価格センター取引が低調となったことを受けて、コメ価格センター取引価格の指標性を確認する観点から、相対取引価格について、農林水産省が06年産米から年間取扱数量5,000トン以上の全国出荷団体等と卸売業者の取引価格を調査、公表。その後も米の価格動向を把握するため引き続き実施。



資料：(財)全国米穀取引・価格形成センター入札結果、農林水産省「相対取引価格」
注1：価格には、包装代、運賃、消費税相当額等を含む。注2：年産別平均価格(24年産は、出回りから25年3月までの速報値)。

表 小売価格と卸売価格の差 (円/60kg)

	卸売価格	小売価格	差額
24年産	24,500	50,604	26,104
23年産	15,315	25,056	9,741
差額	9,185	25,548	16,363

正味比較とはならないが、60kg換算で消費者への販売価格の上昇が2万5548円に対して、卸売業者への販売価格の上昇は9185円にしかなっていない。

統計の出所が違つので正確な比較とはならないが、60kg換算で消費者への販売価格の上昇が2万5548円に対して、卸売業者への販売価格の上昇は9185円にしかなっていない。

「米の高騰で農家が儲かっている」などというウワサはとんでもない間違いで、しかも農家が値を吊り上げるために米を隠しているときまでいわれる、生産者も困惑している。在庫が何処にあるのかを検証しなければならぬ。

そもそも、米は足りていない、という説が有力となってきた。短期的には、真実を明らかにして対策を立てなければならぬ。長期的には、主食用米は増産し、販売先を確保していくことが求められる。

◆卸売価格と消費者価格の差があまりすぎる
全国出荷団体等と卸売業者との取引価格では、24年産価格が2万4500円/60kgと23年産価格の1万5315円/60kgを比べると確かに9185円(60%)増加している(表参照)。

従って、その差額の1万6363円は、生産者に入らずに上昇したということとなる。

農家レストランの売上げ増加 観光農園・民宿 23年度 6次産業化総合調査

表 農業生産関連事業の業態別年間総販売(売上)金額 単位：100万円

	年間総販売(売上)金額	農産物直売所	農産加工	農家レストラン	観光農園	農家民宿
23年度	2,208,274	1,126,420	999,786	39,434	37,281	5,352
22年度	2,176,515	1,087,897	1,012,818	35,236	35,999	4,565
前年比%	101.5	103.5	98.7	111.9	103.6	117.2

農水省は3月31日、23年度6次産業化総合調査結果を公表した。この調査は、農業者等による農産物の生産関連事業(農産物直売所、農産加工、観光農園、農家民宿及び農家レストラン)による所得の増大をもたす取り組みを総合的に調査するもので、生産関連事業を営む事業所を対象に、販売(売上)金額、従事者数等を調査している。全国の農業生産関連事業による年間総販売(売上)金額は2兆2083億円で、前年度に比べて1.5%増加した表)。業態別にみると、農産物直売所は1兆1264億円で前年度に比べ3.5%増加、農産加工は同1.3%の減少となった。年間総販売(売上)金額に占める業態別の割合をみると、農産物直売所が最も高く全体の51%を占め、農産加工が約45%となっている。

しかし、全体から見れば少ない割合ではあるが、農家レストランが394億円(前年比11.9%増)、観光農園が372億円(同3.6%増)、農家民宿も54億円(同17.2%増)と、多くの業態で前年度を上回っている。

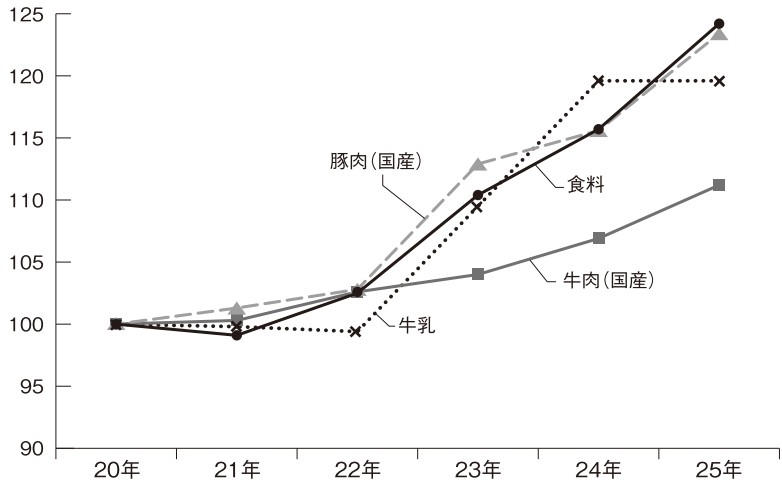
全国の農業者が、より良い経営を目指して、試行錯誤しながらも、懸命に頑張っている。各地域で関係者同士の連携が求められる。

新組合長に藤波氏
クレイン農協
クレイン農協(山梨県)は、4月25日の総代会で役員改選を行い、新代表理事組合長に藤波氏が選任された。

全開連人事
(5月1日付)
▽東日本支所青森事業所(仮配属) 梅田知高▽
西日本支所(同) 村田翼

食料品の消費者物価指数上昇 畜産物の指数上昇も牛肉は鈍い

消費者物価指数(3月)



総務省が4月18日に、20年を基準(100)とした消費者物価指数を公表した。今回は毎年3月のデータで比べてみた。食料品全般では、25年3月で20年より24.2%上昇した。前年より8.5%上昇しており、4年連続の上昇となった(図参照)。国産牛肉は、5年連続で上昇しているが、食料品全般と比べると伸び率が鈍い。20年より11.2%上昇したが、前年からは4.3%の上昇にとどまった。食料品全般で物価が上昇している中で、やはり単価が高い牛肉は伸びが鈍くなっている。国産豚肉は、食料品全般と似たような動きとなっている。ここ数年、枝肉相場が好調なことから、順調な伸びを示している。20年より23.4%上昇し、前年より7.8%上昇した。牛乳は、20年から22年にかけてやや下降したが、24年にかけては乳価交渉で値上げとなった。しかし、24年は値上げが無かったため、物価指数も横ばいとなった。また、米については、24年まではほぼ横ばいの1.7%上昇にとどまっていたが、今年は95.3%上昇という驚異的な動きとなっている。

開拓組織の動き

6月に予定されている開拓組織の主な行事は次のとおり。

- 6日 ㈱全日本農協畜産公社株主総会(東京)
- 10日 全開連・全国開拓振興協会理事会
全日本開拓者連盟中央常任委員会
- 11日 全日本開拓者連盟通常総会(ルポール麴町)
- 全国開拓振興協会通常総会(同)
- 20日 富士開拓農協通常総会
- 23日 豊橋農協通常総会
- 24日 佐賀県開拓畜産事業通常総会
- 25日 ゆづき青森農協通常総会
福岡県畜産事業協議会常総会
- 26日 肥後開拓農協通常総会
徳島県農協通常総会
- 27日 香取開拓農協通常総会
ジャパンビーフ農協通常総会
- 30日 静岡県開拓農協通常総会
開拓ながさき農協通常総会



実は健康のカギの伝統食 牛肉をもっと食べよう

美味しく貴重なタンパク源である牛肉だが、贅では肉食の禁止と解禁が沢山のイメージや「肥満」になる「コレステロール値が高くなる」などの誤った情報が先行し、健康維持に果たす牛肉の役割についてはあまり知られていない。

しかし、近年の研究で牛肉は健康維持に不可欠な食品であることが解明されている。日本人と牛肉の歴史を振り返り、牛肉を食べることの意義を紹介する。

◆実は長い日本人と牛肉の付き合い
「肉食之説」に始まり、明治時代には牛肉ブームが起き、「牛鍋屋」が大流行した。また、出島があった長崎県では、戦前から既に草野丈吉の西洋料理店「自由亭」で、牛のロース煮、ビフテキなどのメニューが確認されており、「レモンステーキ」も長崎の郷土料理として存在している。

◆「脂身が多くて体に悪い」は誤情報！
「粗食＝健康」は誤りである。牛肉の脂身が豊富であることは、肉の栄養価を支えている。牛肉の脂身が豊富であることは、肉の栄養価を支えている。



程良い脂身の乗った開拓牛

また、牛肉のタンパク質にはホルモンを作る働きや生体調整機能があるので、牛肉を食べると元気が出るのはいくらも栄養素の働きのおかげだ。このほか、東洋医学の「薬膳」の世界でも牛肉は重要な栄養源で、「消化器を補う」などの役割があり、内臓を元気にする働きがある。

◆食生活の中に牛肉を

脂身が苦手な人も、脂質不足は健康に良くないため、食べやすく調理するなどして、食生活に取り入れる必要がある。必須の栄養源として長く日本人の食生活を支えてきた牛肉をより沢山食べ、健康の維持増進を図りたい。

質を摂取することで、脳の衰えの防止になることや、タンパク質が高齢者のフレイル（心身の機能が低下した状態）の対策となる。数々の研究から実証されている。

現状も、薩州開拓農協の組合員により肉牛生産が行われており、畜産が盛んである。

一方、畑作も徐々に伸びていった。用水路を基盤の目のように整備したり、道路などのインフラ整備を着実に進めていくことで、メロンや花木の栽培も発展していった。

串良平和公園には、戦争で亡くなった方々を祀る慰霊塔が建てられている。74年、この公園内に開拓記念碑が建てられ、慰霊塔とともに、この地を見守っている。

開拓地の発展と平和を願う碑 鹿児島県鹿屋市・星ヶ丘開拓



鹿児島県鹿屋市串良町の星ヶ丘開拓は、大隅半島の中央部に位置する標高50m程の温暖な地だ。戦中は、教育航空隊の串良基地があり、戦末期には特別攻撃隊の基地として使用された。終戦を迎えるまでに、363名の特別攻撃隊員と210名の一般攻撃隊員がこの地から飛び立ち、その若く尊い命が失われた。終戦後、基地の用地など480haが開墾される



右後方の慰霊塔とともに、この地を見守る

畑作が思うように伸びず、畜産にシフトする生産者が増加し、酪農は大きな努力の末に、鹿屋市は県内有数の酪農地帯として発展することになった。また、酪農とともに肉用牛生産にも力が注が

石田さんの

おいしい！畜産全開レシピ



〈湯煎の場合〉

④肉を焼く前に、鍋に水を入れて火にかけ、ザル、落とし蓋の代わりに耐熱の皿を温める

⑤ラップした肉を耐熱のジッパー付きポリ袋に入れて空気を抜く

⑥水が沸騰したら火を止め、牛肉をポリ袋ごとザルに入れ、皿で蓋をしてさらに鍋の蓋をし、20分置く

⑦ポリ袋を取り出し、再び火にかけ、沸騰直前で火を止める。ポリ袋の上下を返して、再び湯に入れ蓋をして20分置く

☆ソースの作り方
みじん切りにした玉ねぎをバターで炒める。透明になったらきたらAを加える。肉汁が出ていれば一緒に煮詰めて、とろみが出たら完成



②塩、おろしにんにく、黒コショウをすり込み

④電子レンジ600Wで1分加熱し、裏返してさらに1分加熱する

⑤アルミホイルに包んでその上からタオルでくるみ20分放置する

～ローストビーフ 材料～	
・牛モモ肉のブロック	300～350g
・塩	肉の重さの1%
・おろしにんにく	適量
・黒コショウ	適量
・オリーブオイル	適量
ソース	
・バター	15g
・玉ねぎ	60g (1/4～1/3個)
・砂糖	小さじ1
・醤油	大さじ2
・赤ワイン	大さじ2
・みりん	大さじ2
・黒コショウ	適量
・おろしにんにく	適量
・肉汁	(加熱後出た場合)

④電子レンジ600Wで1分加熱し、裏返してさらに1分加熱する

⑤アルミホイルに包んでその上からタオルでくるみ20分放置する

栄養コメント



★牛肉について

牛モモ肉は筋肉が集まっている赤身の部分で、ローストビーフに向いています。脂身が苦手な人や脂質が気になる人におすすめです！

また、牛肉は鉄分、亜鉛などのミネラルが豊富です！

◎鉄分↓貧血予防
肉類などの動物性食品に含まれる鉄（ヘム鉄）は、豆類・野菜類

などの植物性食品に含まれる鉄（非ヘム鉄）に比べて吸収率が高く、効率よく鉄を摂ることが出来ます！
◎亜鉛↓皮膚炎・味覚障害予防
体内にわずかな量しか存在しませんが、体内の酵素の成分となり体の機能を正常に維持する栄養素です。代謝を良くし、免疫機能の維持等に役立ちます！

広大な山地酪農のストーリーと乳製品

農場拝見 高知県 (有)斉藤牧場

高知県南国市は高知市の東にある。北部の広大な山を開拓して山地酪農に取り組む(有)斉藤牧場を紹介する。

●**牧場の歴史**：現在の経営者は斉藤佳洋さん(63)で、初代は父・陽一さん(90)と母・淑美さん(89)。同市金地で水田酪農を行っていたが、1968年に山地酪農を志し再入植。ブルドーザーでダンプカーが通れる道を整備した。

佳洋さんの妻・喜美子さん(56)を始め、長男・雄也さん(26)、長女・歌奈さん(24)、次男・大也さん(22)、次女・愛奈さん(20)、三女・麗奈さん(16)、四女・鈴奈さん(14)の家族全員で、酪農を続けてきた。

●**牧場の現在**：現在の飼養頭数は35頭で、年間の乳量は約4000kg/頭ほど。25haの山の芝草地のほかに、2haのイタリアンライグラスを栽培。乾草やサイレージにして冬場に給与している。現在でも再入植前の水田で水稻栽培を続けているほか、四方竹などのタケノコ残さやカブの千枚漬け残さ、近隣農家から出る余ったダイコンなども給

与。通年で放牧しており、牛は4～9月頃の芝がある時期は常に芝を中心に食べ、山の湧き水を飲む。牛の頭数確認と健康状態の確認・搾乳のため1日2回搾乳舎に呼ぶが、見つからない時には家族で手分けをして探す。

小さい牛が大きい牛に食べ負けないよう、月齢ごとに山の中で場所を分けて放牧。雄牛1頭で自然交配を行っており、1年半ほどで更新し、引退した雌牛も牛肉として出荷。牛乳・ジェラート・牛肉の全てを近隣の「道の駅南国風里」に出荷し販売している。

●**今後の目標**：現在、牧場の業務に従事しているのは陽一さん・淑美さん・佳洋さん・喜美子さん・大也さんの5名だが、麗奈さんや鈴奈さんも幼少期から子牛の世話や搾乳などに携わってきた。

喜美子さんは対外交渉も行っている。朝ドラ「あんぱん」をきっかけに行われるようになったイベントに牛乳やジェラートを出品。前述のダイコンなども農家と交渉して入手できるようになった。現在、牧場経営は佳洋さん



⑤：山地酪農の一部。奥左が斉藤家の住居、右は搾乳舎
⑥：ジェラートと牛乳、⑦：佳洋さん、子牛と一緒に

と大也さんがメインで、陽一さんは主にトラクターなどの機械修理を担当。将来は大也さんが牧場を継ぎ、現在栄養士を目指している歌奈さんが乳製品のメニュー開発、獣医師となる愛奈さんも牧場の牛の管理に携わっていく予定だ。

現在は牛乳を「南国斉藤牧場の山地酪農牛乳」としてブランド化して販売している。今後は、歌奈さんがソフトクリームやバター、ヨーグルトなどの新たなメニュー開発を担当し、キッチンカーや観光牧場の運営もしたいと佳洋さんが目標を語ってくれた。

「食べさせて駆除」を基本に 畜舎のネズミ・ハエ対策

鹿児島大学が主催するSKLVセミナーで、エランコジャパン㈱の山本喜康氏が「畜産現場におけるネズミ防除」と題して、また、岩田隆氏が「畜産におけるハエ対策」と題して講演を行った。講演から対策の内容を紹介する。

第7回セミナー：ネズミ対策

◇ネズミは様々な疾病を媒介する。また、体重の10%程度のエサを盗食するため、多量の飼料の損失が発生する。何でも齧るため、配線などを齧り、豚舎などの火災の原因となることも多い。

隠れる場所があると住みつきやすいので、畜舎間などの除草や砂利を敷く、セメントで埋める等の対策が有効。

◇クマネズミは第一世代の殺鼠剤に耐性があるため、第二世代のクマリン系殺鼠剤を紹介。1～2回の喫食で効果があり、粉剤であるため、おとり資材と混ぜやすく、写真1のようにネズミが好むサツマイモなどの混ぜ物に混ぜて毒エサにする。最初は粉剤：混ぜ物＝4：6の重量比で始め、ネズミが慣れたら混ぜ物の20%の量の同剤を混ぜて与える。また、牛等の誤食を防ぐため、設置場所に注意する。

◇雨に濡れる場所や野外でも使える「ベイトステーション(写真2)」で



写真1 ネズミが好きなサツマイモに飼料と一緒に混ぜる

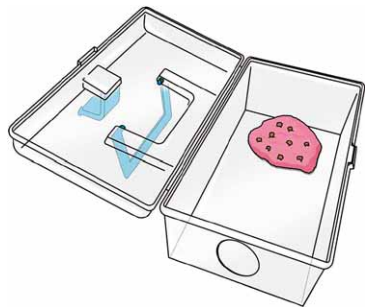


写真2 100円ショップの工具箱から手作りできるベイトステーション

の同剤入りの毒エサの設置も有効。ネズミは警戒心が強く、最初から毒の入ったエサを入ると食べないため、毒の無いエサを食べたことを確認してから同剤入りの毒エサを設置することが重要だと強調した。

第15回セミナー：ハエ対策

◇サシバエ・イエバエはともに、病気を媒介したり生産性を低下させる。大量発生した際は薬剤の空中散布も必

花平改良同志会が1位に 25年 岩手県ブラックアンドホワイトショウ

岩手県ホルスタイン改良同志会の主催による、「2025岩手県ブラックアンドホワイトショウ」が5月2日、JA全農いわて中央家畜市場で開催された。

県下14地域から、選りすぐりの未經産牛73頭と経産牛37頭が出品され、日頃の飼養管理と改良の成果を競った。

花平ホルスタイン改良同志会からは7頭が出品され、経産牛(2歳以上3歳未満)の部で、鈴木稔氏の出品牛が見事1席に選ばれた。



また、3頭1組での同志会対抗戦も行われ、経産牛の部で花平ホルスタイン改良同志会が1位に輝き、地域の底力を見せた。

要だが、産卵で増えるため、ウジ退治を最優先で取り組む。シロマジンが主成分の粒タイプの殺虫剤が紹介された。

◇同剤は原則、25g/m²の割合で撒く。導入前は敷料の上から撒き、敷料交換をしない場合、導入2週後以降は2週間隔でフンの上に撒く。ハッチ・離乳子牛舎では、敷料に均一に撒く。水に溶かして散布することも有効。この場合も、1m²当たり25gになるように水に混ぜる。

育成牛舎では壁・柱・柵の下敷料を週1回掘り散布する。壁にたまったフンをマスの中に落とす(写真3)。



写真3 育成牛舎でのポイント
写真1・2・3全てエランコジャパン㈱の資料から

つなぎ牛舎では除フン後、週1回水に溶かして撒く。フリーバーンの場合、柱の周囲や牛房の隅に散布する。

誘因殺虫法では、顆粒で置くタイプや壁などに塗るタイプを紹介。ハエが集まる場所に設置し、24時間効果を持続させることの重要性を強調した。

使用前、周囲よく見てラベル見て 25年度農薬危害防止運動

農水省は4月25日、「25年度農薬危害防止運動」の実施を発表した。実施期間は6月1日～8月31日。農薬を使用する機会が増えるこの時期に、農薬による事故・被害を防止するため、農薬の安全かつ適正な使用や保管・管理、環境への影響に配慮した農薬の使用等を推進する。

同省が2月に公表した「23年度農薬の使用に伴う事故及び被害の発生状況について」によると、23年度の農薬の使用に伴う人に対する事故は20件、農作物や家畜、魚類の被害は26件発生している。いずれも前年より発生件数が増えている。

25年度の運動テーマは「使用前、周囲よく見てラベル見て」とした。農薬ラベルの表示事項の遵守と周辺の環境への農薬の飛散防止を徹底することなどを呼び掛けていく。

取り組み事項は、農薬の正しい知識の普及啓発、農薬による事故防止のための指導、適正使用等の指導などの5項目。重点的に指導に取り組むのは、①農薬ラベルによる使用方法の確認②土壌くん蒸剤使用時の適切な取り扱い③住宅地等で農薬を使用する際の周辺



への配慮及び飛散防止対策④誤飲、盗難等防止に向けた適切な保管・管理の4項目となっている。

必ずラベルに同省の登録番号が記載されている農薬を購入し、散布前にもチェックして使うようにする。ラベルに土壌改良と記載されているが、「病害虫に効く成分入り」などのクチコミがある資材や、農薬登録されていないのに使ってみるとなぜか害虫が死ぬような資材はすぐに使用を中止し、同省に連絡するよう、呼び掛けている。

土壌の砕土率をリアルタイムで計測

トラクタのモニターで確認

近年、大豆、麦等の国内生産の重要性が高まっている。これらの作物の生産性向上のためには出芽率の向上が必要であり、出芽率には砕土率が影響するとされている。

砕土率とは、土壌中の土塊の長径が20mm未満のものが占める割合を重量ベースで表したものだ。砕土率が低い＝大きい土塊が多い状況だと、種子と土壌との密着が悪くなるため出芽率が下がり、収量にも影響する。これまで、

砕土率の計測は、人の手でふるいを用いて土塊を分離した後に重量を測る必要があったため、農業現場で行われることはほとんどなかった。

農研機構は、これまでカメラで撮影した土塊の画像から砕土率を計測する技術の開発に取り組んできた。今回、この技術を自動化・高速化したことで農業機械への搭載が可能になり、耕うん作業中にリアルタイムで砕土率を確認できるようになった。

植物ホルモン忌避剤でアザミウマ防除 みどりシステムに貢献

する感受性が低下している難防除害虫で、生産現場からは新たな防除技術の開発が求められている。

プロヒドロジャスモン（以下、PDJ）は植物ホルモンの一種。PDJを主成分とした植物成長調整剤は、農業生産現場では、りんごやぶどう（巨峰）の果実の着色促進、かんきつ類の花芽形成抑制（収量の安定化）、落果防止、浮皮軽減等を目的として広く普及している。また、同剤を施用した植物では、害虫抵抗性が誘導されることが解

日本茶を手軽に楽しむ情報を発信 チャチャっとお茶生活キャンペーン

農水省は4月から「お茶をはじめてみよう～チャチャっとお茶生活キャンペーン～」を開始した。消費者に日本茶を楽しんでもらう情報を発信することで、消費を拡大させるねらいだ。

お茶は日本人の生活文化に深い関わりがあるが、長期的に消費量・産出額ともに減少傾向にある。一方、24年のお茶の輸出額が364億円と過去最高を更新するなど、海外からの注目度が非常に高まっている。国内でも、お茶と観光業など、他業種との取り組みや、紅茶やウーロン茶といった緑茶以外の生産などが始まっており、今後も暮ら

しの中でお茶を身近に感じながら、時代に合った新しい楽しみ方が広がっていくことが期待されている。

新茶シーズンを迎えて日本茶がおいしくなるこの時期に、お茶の多くの魅力を知ってもらい、毎日の暮らしの中で日本茶を日常的に飲みたくなるような情報を発信する。

同キャンペーンでは、茶産地や茶関連事業者から、お茶を美味しく手軽に飲める工夫や取り組みに関するメッセージ（100～150字程度。動画やSNSのリンク等を含む）等を募集する。同省は、寄せられたメッセージなどを、

産地又は事業者名、事業者のウェブサイトへのリンクと合わせて、キャンペーン特設ウェブサイトや省公式SNSで情報発信する。

特に日本茶に触れる機会の少ない若い世代を中心に幅広い消費者に対して日本茶の良さを知ってもらい、毎日の生活の中でお茶を楽しむ時間を増やしてもらうことで、消費拡大を推進していくとしている。

応募・問い合わせ先は以下の通り。農水省農産局果樹・茶グループ

TEL：03-6744-2194

メール：nihoncha_kurashi@maff.go.jp



このシステムは、カメラ・パソコン・GNSS（GPSのようなもの）とモニターから構成され、カメラが取得した耕うん直後の土壌表面の画像をパソコンで画像処理することで、砕土率を計測する。砕土率の計測結果はトラクタの運転席に設置したモニターに表示されるため、耕うん状況に応じた作業速度の調整などが可能になる。また、

砕土率の計測と同時にGNSSで位置情報を取得しているため、オフラインでも場の砕土率マップを作成することもできる。

同機構は今後、リアルタイム砕土率計測システムを用いることで、ほ場全体の砕土率と耕うん時の作業能率の向上、出芽率改善効果を検証し、早期の社会実装を目指すとしている。



スマートフォンをお持ちの方は
こちらから

必要としている全国のとまと・ミニとまとの生産者や普及機関に向けて、技術の概要や特徴・作業手順・検証事例などを紹介し、防除技術を導入する際のノウハウを解説している。

同手順書は、次のURL（<https://sop.naro.go.jp/document/detail/178>）かQRコードからアクセスし、利用者登録（無料）することで、全編を誰でも閲覧することが出来る。

哺乳子牛の管理のポイント

東北研修会の発表から

3月に開催された東北開拓組織連絡協議会の研修会から、雪印種苗㈱の阿部氏の講演「哺乳子牛の管理のポイント」の内容を紹介する。

〈子牛管理の今昔〉

はじめに、子牛管理に関する技術が、以前と比べて多くの点で変わってきていることを挙げた。主に乳用牛では、代用乳を4ℓ／日（粉量400～500g）程度給与して早期離乳させていたが、現在は倍の1000g以上給与により発育を促進するケースが見られている。

また、哺育期におけるスターターと粗飼料のバランスにも変化が見られている。哺育中の粗飼料は少量で慣らししていくのが一般的だった。しかし、最も危険なスターターの過剰給与は軟便やアシドーシスにつながるため、現在は乾草などの粗飼料をしっかりと与えることが推奨されている。

ミルク給与では、バケツで与えてがぶ飲みさせるのではなく、固めの乳首を用いてちびちび哺乳させることを推奨している。

〈子牛の下痢〉

離乳前後でスターターなどの採食量が増えると軟便になることがある。その理由として、①ルーメンが未発達の子牛が消化の良いスターターを多く摂取することで吸収しきれず、ルーメン内が酸性（アシドーシス）傾向になる②分解性のタンパク質を過剰に摂取することで、消化組織に負担がかかり、消化不良になる一の2点を挙げた。

これらを予防・改善するためには、スターター給与量を少しずつ増やし、粗飼料をバランスよく組み合わせて給与することがポイントとなる。

消化不良由来の下痢についても紹介があり、その原因の一つとして「ミルクの給与設定が合っていない」ケースを例に挙げた。ミルク濃度の過不足は、第四胃や消化管の浸透圧調整に負担を与える。また、ミルクの給与間隔を短くすると、消化前に次のミルクがお腹に入り消化酵素の働きが追い付かず、下痢につながる。

ミルク給与時の温度が38～40℃にな

ミルク多給(1000g/日以上)と通常(500～600g/日)の一般的な違い

	ミルク多給	ミルク通常
哺乳期の発育（体重）	優	劣
哺乳期の発育（体高）	優	劣
哺乳期の病気（風邪）	少	多
哺乳期の病気（下痢）	多	少
哺乳期スターター採食量	少	多
哺乳期乾草採食量	多	少
離乳までの期間	長	短
哺乳期のコスト	高	安
離乳後の病気（風邪）	多	少
離乳後の病気（下痢）	多	少
種付月齢	早	遅
初産分娩月齢	早	遅
初産乳量	まちまち	まちまち

阿部氏の発表資料から作成

るように、溶かすときのお湯の温度を調節する必要がある。通常は42～55℃が適している。また、哺乳ロボットを利用している場合、代用乳の銘柄や給与プランを変更した際は必ず計量して投入したうえで、ロボットの設定を確認する必要がある。

〈代用乳などの給与の原則〉

代用乳などを給与する際は、定時定温定量（決まった時間に、決まった温度で、決まった量を与える）の原則を守る。

ミルクを多給（1000g／日以上）した場合と通常給与（500～600g／日）

した場合の違いを表にまとめた（他方より優れている部分が太字）。子牛の発育が不十分だったり、体調に変化が見られる場合は栄養補給のために多給が推奨され、子牛の飼育環境や疾病対策が十分に確保されていればコストのかかるミルク多給は必ずしも必要ではなく、個体に合わせて給与量を選択する。

講師である阿部氏は、この表はメリット・デメリットをまとめたもので、多給・通常のどちらかにするかは、牛の状況から判断することが重要としている。

がない地域から順次飼養豚のワクチン接種の中止を進め、最終的に全国でのワクチン接種を中止し、完全な清浄化を目指していくこととしている。

ランピースキン病の感染拡大は、まん延防止に法的強制力をもった措置を講じられず、十分な防疫対策が実施できなかったためとしている。これを受け、5月13日に第72回家畜衛生部会で答申が行われ、同病に「家畜伝染病」と同程度の強制力を持った措置を行えるようにする方針が示された。7月下旬に政令が定められる見通しだ。

罰則強化など法改正の検討も

25年度全国家畜衛生主任者会議

農水省は4月18日、「25年度全国家畜衛生主任者会議」を開いた。冒頭、江藤拓農水大臣が登壇し、「口蹄疫など、一度発生すれば取返しがつかないような状況が日本のすぐ傍まで迫っている」と警戒を呼び掛けた。

○豚熱関連○

25年は4月17日時点で、群馬県で3例、千葉県で1例発生している。4月11日には宮崎県において野生イノシシの豚熱陽性が確認され、南九州では初発となった。既に同県の感染確認地域の周辺ではワクチン散布を実施しており、改めて衛生管理や早期通報の徹底を呼び掛けた。

○口蹄疫○

海外では口蹄疫が継続的に発生している。隣国の中国や韓国でも発生が確

認されている。日本への同病の侵入リスクは極めて高い状況にあるとし、家畜伝染病予防法の改正による違反者への罰則強化などで水際検疫体制を強化していく方針を示した。

○ランピースキン病○

昨年11月6日に福岡県の乳用牛で国内初の感染が確認されてから、福岡県で19事例、熊本県で3事例が確認された。疑症牛を含め国内では累計230頭の発症が確認された。

同病の発生を受け、現在も輸出が制限されている相手国があり、輸出再開に向けて協議中だ。

緊急事業と子牛基金が発動

1～3月分 事業は継続延長

農水省は4月18日、肉用子牛生産者補給金制度の補給金単価（1～3月分）を公表した。

その他の肉専用種で平均売買価格が27万8100円と、保証基準価格の32万8000円を下回ったため、交付が行われる。補給金単価は4万9900円／頭。

また、農畜産業振興機構は同日、優良和子牛生産推進緊急支援事業の奨励金単価（1～3月分）を公表した。黒毛和種で平均価格が発動基準価格を下回ったため、黒毛和種は北海道と兵庫

県を除く3ブロックで交付が行われる。また、年平均価格（24年4月～25年3月）で計算される「その他の肉専用種」についても、平均価格が発動基準価格を下回ったため、子牛基金と併せると最大6万9900円が交付される。「緊急事業」は24年度のための臨時的な事業であったが、25年度も継続して実施される。また、新たに「和子牛産地基盤強化緊急特別対策事業」が25年度に実施される。事業の詳細は来月号で紹介する。

○家畜伝染病対策の強化○

訪日外国人の増加に伴い、違反品の持ち込みも増加しており、中には組織的に複数回持ち込もうとする悪質な事例も確認されている。検討会の議論を踏まえ、法律改正などで取り締まりを強化していく方針を示した。

豚熱については、同病発生時の殺処分分の範囲見直しの検証や、感染リスク

乳用種のための発動

牛マルキン3月分

農畜産業振興機構は5月14日、肉用牛肥育経営安定交付金（牛マルキン）の交付金単価（25年3月分、確定値）を公表した。

乳用種で標準的販売価格が標準的生産費を下回ったため、交付が行われる。

肉専用種は21都道府県で発動した。

交付金単価（1頭当たり）は、乳用種が2万1478.5円（前月は3万2234.4円、いずれも確定値）となっている。

前月分と比べ、素畜費が大きく減少したため、交付金は減額となった。

また、同機構は25年度牛マルキンの1頭当たりの負担金単価を表のように定めた。

25年度の登録肉用牛1頭当たりの負担金単価				
品種区分		(円／頭)		
肉専用種	都道府県	負担金単価	都道府県	負担金単価
	北海道	28,000	岩手、京都	11,000
	群馬	24,000	熊本	11,000
	福島	21,000	山形、静岡、福岡、佐賀、長崎	10,000
	青森、宮城、茨城、栃木、埼玉	19,000	秋田、鹿児島	9,000
	神奈川、鳥取	17,000	滋賀、大分、宮崎	7,000
	山梨	16,000	徳島	6,000
交雑種 乳用種	千葉、東京、長野	15,000	ほか18府県	5,000
		17,000		
		18,000	農畜産業振興機構の資料を元に作成	

近年の猛暑でも分娩率86%

24年度 養豚農業実態調査

(一社)日本養豚協会は4月、24年度(8月1日現在)の養豚農業実態調査の結果を発表した。2197件の養豚生産者のうち、471件の有効回答が得られた。

経営形態では、個人経営が27.3%、法人経営が70.4%などとなっている。また、経営タイプとして、一貫経営が84.6%、肥育経営が12.1%、繁殖経営が3.3%だった。

交配については、「自然交配のみ」が21.6%、「人工授精のみ」が51.5%、「自然交配と人工授精の併用」が22.1%となっている。

繁殖成績(表1)を見ると、24年の

分娩率は86.3%で、近年の猛暑などによる落ち込みはあまり見られなかった。1腹当たりの産子数は13.2頭で20年より4.8%増加している。また、離乳頭数は10.6頭で同3.8%増加。近年、繁殖能力の育種改良の進展などもあり、繁殖成績は上昇している。

肥育成績(表2)を見ると、出荷体重は114.7kgで、20年より1.0%増加している。枝肉歩留まりも同1%の増加となった。

上物率は、日格協での格付けで58.4%となり、同2.7%の増加となった。

での推移となった。

5月の連休後になっても、B3で1600円台後半の、強もちあいの推移となっている。

【和去勢】4月の東京食肉市場の和牛去勢の税込み枝肉平均単価はA4が2269円(同105%)、A3が2142円(同106%)だった。前月に比べ、A4が4円、A3は31円ともに上がった。

5月に入ると、A4で2300円台での推移となっており、頭数減もあり、強もちあいの展開となっている。

【出荷頭数】5月の出荷頭数は、和牛4万1900頭(同99%)、交雑種2万900頭(同101%)、乳用種2万2400頭(同92%)と、和牛・乳用種はやや減少する見込み。

【輸入量】農畜産業振興機構は5月の冷蔵・冷凍品の輸入量を総量で4万4100t(同91%)と予測。内訳は、冷

表1 繁殖成績

	分娩率(%)	産子数	哺育開始頭数	離乳頭数	育成率(%)	母豚回転数
24年	86.3	13.2	11.8	10.6	90.2	2.3
23年	86.2	12.7	11.5	10.4	90.3	2.2
22年	85.5	12.8	11.5	10.3	90.2	2.3
21年	86.3	12.7	11.5	10.3	90.2	2.3
20年	85.7	12.6	11.2	10.2	90.6	2.2

表2 肥育成績

(重さはkg)

	出荷日齢	出荷体重	D.G.	枝肉重量	枝肉歩留(%)	上物率(%)
24年	182.8	114.7	0.628	74.4	65.6	58.4
23年	182.2	113.8	0.625	75.0	65.5	55.4
22年	182.6	113.4	0.621	74.7	66.1	56.4
21年	182.8	113.2	0.619	75.7	64.5	55.8
20年	182.4	113.6	0.623	75.6	64.5	55.7

牛枝肉

夏が近づき、焼肉シーズンの前倒しに期待

初夏の季節となり、これから暑さが本格的になってくるので、焼肉シーズンの前倒しに期待したい。

需要の急激な伸びは難しいが、和牛、乳用種は頭数減が見込まれ、強もちあいが予想される。

【乳去勢】4月の東京食肉市場の乳牛去勢B2の税込み枝肉平均単価(速報値)は、1185円(前年同月比128%)となり、前月より54円上がった。

5月も頭数は減少傾向にあり、相場も強もちあいの動きと見られる。

【F1去勢】4月の東京食肉市場の交雑種去勢の税込み枝肉平均単価は、B3が1612円(同100%)、B2が1496円(同100%)だった。前月に比べ、B3が110円増、B2も102円増と、強含み

蔵品1万6200t(同91%)、冷凍品が2万7900t(同91%)。ほとんどの輸入先で、冷蔵・冷凍品ともに前年を大幅に下回ると予測される。

向こう1ヵ月の東京食肉市場の税込み枝肉平均単価は、乳去勢B2が1100~1200円、F1去勢B4が1650~1750円、同B3が1600~1700円、同B2が1500~1600円、和牛去勢A4が2250~2350円、同A3が2150~2250円での推移か。

豚枝肉

徐々に動きが活発となり、相場は上昇傾向

4月の東京食肉市場の豚枝肉税込み平均単価は、上物597円(前年同月比97%)、中物は573円(同96%)となった。前月に比べ上物が18円、中物も21円減と、予想に反して低調な動きとなった。しかし、4月も終盤からは上物で600円台に回復してきた。

5月に入っても600円台をキープし、徐々に上がってきている。今後は、時

畜産物需給見通し

期的にも相場は上昇傾向に向かうと見られる。

農水省の肉豚生産出荷予測によると、5月は134万頭(前年同月比98%)と、前年をわずかに下回る予測。しかし、豚熱等の拡大がなければ、出荷頭数は平年並みと予想される。

農畜産業振興機構の需給予測による

と、4月の冷蔵・冷凍品の輸入量は総量で8万2300t(同88%)と、前年よりかなり下回る見込み。内訳は、冷蔵品3万1600t(同94%)、冷凍品5万700t(同84%)。冷凍品は、米国産・欧州産の輸入量の減少が見込まれる。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が600~700円、中物も550~650円と、上昇傾向の展開となるか。

4月の子牛取引状況

(頭、kg、円)

ブ ロ ッ ク	品 種	頭 数		重 量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北 海 道	乳去	615	482	305	295	209,599	191,014	687	648
	F1去	2,368	2,101	342	331	402,634	400,136	1,177	1,209
	和去	2,577	2,310	342	335	789,056	703,640	2,307	2,100
東 北	乳去	1	—	123	—	37,400	—	304	—
	F1去	2	2	321	305	217,800	218,900	679	718
	和去	2,449	2,488	328	321	668,818	636,430	2,039	1,982
関 東	乳去	6	41	239	274	82,317	275,805	345	1,008
	F1去	159	142	353	339	409,373	399,401	1,158	1,178
	和去	955	681	328	330	740,915	727,131	2,258	2,205
北 陸	乳去	—	—	—	—	—	—	—	—
	F1去	—	—	—	—	—	—	—	—
	和去	177	66	296	317	620,095	690,433	2,092	2,178
東 海	乳去	—	—	—	—	—	—	—	—
	F1去	57	39	320	316	454,030	425,813	1,419	1,348
	和去	229	472	272	289	732,317	714,415	2,693	2,469
近 畿	乳去	—	—	—	—	—	—	—	—
	F1去	—	—	—	—	—	—	—	—
	和去	354	409	265	269	1,060,173	1,016,505	4,008	3,774
中 四 国	乳去	35	34	281	260	171,820	150,409	612	578
	F1去	284	237	327	320	430,689	436,352	1,317	1,361
	和去	969	884	271	314	703,573	638,005	2,600	2,035
九州・沖縄	乳去	4	2	208	341	45,925	138,050	221	405
	F1去	358	305	328	318	442,040	437,392	1,348	1,373
	和去	8,440	9,310	304	299	716,023	690,103	2,353	2,310
全 国	乳去	661	559	302	292	205,192	194,574	679	666
	F1去	3,228	2,826	339	329	410,597	407,383	1,211	1,238
	和去	16,154	16,625	314	308	727,905	691,338	2,318	2,245

注：(独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。
価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。—は上場がなかったことを示す。
関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

素牛 スモール

F1スモールが20万円を超えた相場展開に

【スモール】4月の全国24市場の1頭当たり税込み平均価格(農畜産業振興機構調べ、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳雄が8万6848円(前年同月比135%)、F1(雄雌含む)は21万8663円(同172%)と、前月に比べ、乳雄は1万8227円増、F1は2万4307円増と、ともに急騰した。

市場によるバラツキが激しく、乳雄で10万円を超える市場も多くなってきたが、逆に熊本市場が5万円台と価格が抑えられている。

F1も頭数減(前年同月より1500頭ほど少ない)の影響もあり、遂に20万円を超える動きとなった。

【乳素牛】4月の乳素牛の全国1頭当たり税込み平均価格(左表、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳去勢が20万5192円(同125%)、F1去勢は41万597円(同114%)だった。前月に比べ乳去勢は1万618円増、F1去勢も3214円上がった。

乳去勢・F1去勢ともに、スモール同様、一昨年前の搾乳牛減の影響が出てきて、頭数は減少傾向となってくると予想される。

【和子牛】4月の和子牛去勢の全国1頭当たり税込み平均価格(同)は、72万7905円(同112%)で、前月より3万6567円増と、急騰した。

枝肉相場の動きは緩やかだが、和子牛も今後は上場頭数の減少が見込まれているので、相場は強もちあいか。